

妻に叱られて②5

「断筆宣言」で叱られた、  
けれど……」  
土居 修



2015年6月12日、その日の職員会議でどのような議論がされたのか、まったく覚えていない。

「先生方がご家庭に送る文書は、すべて見せてもらいます」

しかしながら、終了間際のO教諭の質問に対するK校長の回答にブチ切れた記憶。男の美学が沸騰した。菅原文太(略敬称)になつてい



「ホーム通信をやめにやあいかんのですかいのう」

無言だった校長を終了後に一瞥し、憤然として席を立った。自席に戻り、帰りのホームで配布した第38号「紫陽花への尽きぬ想い……」を読み返しながら、(窮屈な時代)

を笑い飛ばしていた。そのときであった。「土居さん、ホーム通信をやめるがかよ」

N教頭が傍らに立って、話しかけてきた。「検閲されるのが無性に腹立たしいですか」

「校長には検閲という思いはないんじゃないかな。ぼくは、そう思うけど」

「でも、検閲と同義じゃないですか」

「先生、お母さんが残念だつて」

「でも、検閲と同義じゃないですか」

「それは、そうだけど、でも、やめるのは、惜しいよ」

「見せるだけでしょ。見せてやればいいじゃない」

「あなたらしいわね」

「幸せな教師ね」ということで、ホーム通信を再発行することとなりまし。新しい船にも、まだ古い水夫が必要なのかもしれせん。今まで以上に精魂を傾けて綴っていきま。ご愛読のほど、よろしくお願ひします。

た。専門は理科であるが、外国文学の造詣の深さには脱帽。また、前年の研修旅行では最終の点呼を終えた後、ホテルの一室で、あるいはレストランの薄ら灯りの下で遅くまで酒を飲み交わしている。当時の(窮屈な時代)に叛逆する気骨の人でもあった。

「だって、共有ホルダーにホーム通信があるんですよ。見ようと思えば、いつでも見られるんじゃないですか」

「それは、そうだけど、でも、やめるのは、惜しいよ」

「あなたらしいわね」

「先生、お母さんが残念だつて」

「ふたたび、叱られたと恐れた。だが、そうではなかった。私の思い違い。『ぼか』は校長に対するむき出しの敵意であった。もはや、私を叱る妻ではなかった。ありがた」と感謝した。

「ホーム通信、出したんでしょ」

「うん。けど、もうやめるよ。明日、生徒に謝るしかないね」

「お母さんの了承を得ないままに転記しましたこと、事後承諾とさせていただきます。」

「どうしてですか」

「先生、お母さんが残念だつて」

「先生、お母さんが残念だつて」

「先生、お母さんが残念だつて」